



シルビア・アール／著 古賀祥子／訳
ワールド・イズ・ブルー

192 x 132mm 317頁
出版社：(株) 日経ナショナルジオグラフィック
〒105-8308 東京都港区虎ノ門4-3-12
TEL 0120-86-7420 / 03-5605-7420
ISBN-10: 4863131127 ISBN-13: 978-4863131125

2010年発行
おくだてつし
[評者]：龍谷大学 理工学部 奥田哲士

本書のキーワードを並べてみると「プラスチックごみ」だけでなく、「乱獲」「油汚染」「太平洋ごみベルト」「温暖化」など、非常に幅広い環境やごみにかかわる内容が、「海」という幹を取り巻くように盛り込まれている。内容は、中学や高校の教科書に載っているような内容もあるが、海底1,000mの光、不凍たんぱく質をもつ魚、科学の無知(耳が痛い!)など、自身の体験(思い出)や経験(キャリア)、関連研究者の言葉を引用して、興味を引く読みやすい内容と文章、構成となっている。もちろん著者は学者、一流の研究者であるので、一つひとつの論議が定量的、すなわち数字に基づいており、極めて嘘が少ないと感じた。このように数字も出てくるが、例えば「サメに殺される人間は年に10人もいないが、サメは1億匹も人間に殺される」といった内容や、プラスチックに関しても、「アメリカでのペットボトルの消費は5秒につき約200万本」など容易な表現がされており、さらに、詩の引用やウィットにとんだ逆説(例えば人間だけが絶滅したら地球はどうなる?など)も用意されており、ページをど

んどめくりたくなるのでご安心いただきたい。さらに、このような「深刻な状況」の列挙だけではなく、最後の章には「今ならまだ状況は変えられる」という信念に基づいたいくつかの提案があり、大いに読者の思考の参考になると考える。

環境という学問は、例えば「温暖化」についてもごく一部の研究者は未だに人間の影響では温暖化は起こらないと力説されているほど懐が深い。著者はなるべく中立で偏りなく(「炎上」とは縁が遠い)責任を伴った記述を心がけているように思われ、読者がさまざまな考え方や意見を知っていたりもっていたりされても、一線は超えておらず心地よい学びを保証できると信ずる。ただ、現場、つまり(まさしく)海の中で、全身で感じられた理解、哲学が至る所にじみ出しており、著者の人柄が垣間見られて楽しい方がほとんどであると思うが、クジラが食べられなくなる世界を想像できない方や、海が干上がっても自分には何の影響もないと信じている方にはお勧めできない一冊である。



ベア・ジョンソン／著 服部雄一郎／訳
ゼロ・ウェイスト・ホーム
—ごみを出さないシンプルな暮らし—

210 x 150mm 352頁 定価1,700円+税
発行所：アノニマ・スタジオ | 中央出版 (株)
〒111-0051 東京都台東区蔵前2-14-14-2F
TEL 03-6699-1064
ISBN-13: 978-4877587512

2016年発行
よしはらしゅんいち
[評者] 名古屋市 環境局 事業部 吉原純一

「ゼロ・ウェイスト・ホーム」というタイトルから私が想像したこと、それは、「自然に優しく、環境に負荷をかけないことを何よりも優先するストイックな暮らし」でした。著者の家庭では、1年間に出たごみが、わずかにガラス製のジャー1杯分だった? いったい何を我慢したのでしょうか? ところが、その答えは、訳者である服部さんの原稿にもあるとおり、著者は何も我慢なんかしていない、むしろ大切な自分や家族の「時間」そして「健康」を手に入れているらしいのです。

「無駄なものが増えているスペースを取り戻しましょう!」「便利だと思って使っているその

道具、大切な時間を割いて手入れをする価値が本当にありますか?」モノに囲まれて暮らすことに幸せを感じていた私にとって、本書はまさに革命の書となりました。「時間」「空間」「健康」…「モノ」によってもたらされると思っていたこれらのものが、実は「モノ」を減らすことによって手に入るなんて! 本書には、思わず試してみたいくなるような実践例が満載されていますので、健康的でゆとりあるライフスタイルが実現できるのか、私もチャレンジしてみたいと思います。皆さんもいかがでしょうか?



枝廣淳子／著
プラスチック汚染とは何か

A5版 88頁 定価620円+税
発行所：(株) 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2丁目5番5号
TEL 03-5210-4000
ISBN-13: 978-4002710037

2019年発行
おかやまともこ
[評者] 大正大学 人間学部 人間環境学科 岡山朋子

著者の枝廣氏は、高名な翻訳家かつ環境ジャーナリストである。同氏は2018年8月に設けられた「プラスチック資源循環戦略小委員会」の委員を務め、日本の「プラスチック資源循環戦略」策定に寄与された。本書は、おそらくその経験をもとに、同氏が自ら収集した多くの知見やデータを加えて、極めて精緻にプラスチック問題を分析したものである。

まず、プラスチックの成り立ちとプラスチックによる海洋汚染問題について詳しく説明し、世界

各国の対応を紹介している。さらに、この問題を正しく理解し、正しく対応するための視座を述べた上で、具体的な枠組みを検討している。同氏のぶれない視座に基づいてこの問題を分析すれば、結論として、同氏の考える各主体が取り組むべき行動に帰結する。本書には、この同氏の論理を補完するために非常に多くのデータや事例が詰め込まれており、ブックレットとしては極めて内容の濃いものとなっている。

